



再生

田野武裕

新潮社

再生

田野武裕

再^{さい}生^{せい}

著者●田^た野^の武^{たけ}裕^{ひろ}

© Takehiro Tano 1992,
Printed in Japan



発行 一九九二年三月二五日

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

162 東京都新宿区矢来町七一

電話

〔業務部(03)三二六六―五一
編集部(03)三二六六―五四二一

振替 東京四一八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-385201-1 C0093

価格はカバーに表示しております。

目次

再 生……………5

父になる日……………93

夕 映 え……………149

装画
北村紀子

再 生

再 生

分院の当直へ出かけようとした水島清己は、医局秘書に呼びとめられ、受話器を手渡された。それを耳に当てた途端、若い女性の声が飛び込んできた。

「わたし、みどりです。お兄さんですか？」

駅かららしく、雑音混りの声が、ただならぬ雰囲気で響く。受話器の耳へさらに重心を傾けると、異父妹の松江翠が、いつもの倍の速さで言った。

「母が、出先で倒れたんです。わたしはこれから病院へ行くんですけど、できたらお兄さんにも診ていただきたいと思って」

保険の勧誘先で話し込み、帰ろうとして倒れ、救急車で運ばれたという。

「意識がなくなっているらしいんです」

翠が、不安気に付け加えた。

水島は、当直を誰かに替わってもらって、すぐに駆けつける、と翠に約束して、受話器を置いた。

その足で、廊下の両側に並ぶ研究室を訪ね歩いた。

夕方のせいか空席が目立ち、ほとんど人影がない。かわりに白衣が、だらしなく椅子の背に脱ぎ捨てられている。

医局入口の名札表の前に立ち、四十名ほどいるスタッフの中から心あたりを捜した。火曜日の夜は、医局や研究室の行事がないからだろう、若い人ほどアルバイト病院へ当直に出かけている。気安く頼めそうな人は、皆出払っていた。

病棟へ電話をして、二、三人に当ってみたが、重症患者や実験を理由に断られた。

母親が急病だと言え、無理を通せないでもないだろうが、後日の面倒を考えると憚られた。生みの母親が別にいると、今さら病院内で宣伝したくはなかった。

代役を求める気持が急に失せ、仕方がない、という諦めが湧いてきた。行くのは明朝になると翠が病院に到着した頃に連絡しようと考え、水島は予定通りに分院へ向けて地下鉄に乗った。

だが、地下鉄が動き出すや否や、もつと努力すべきではなかったかという後ろめたさが生じて、気持が落着かなくなった。

三歳の自分を捨て去った翠の母親澄美^{すみ}へのわだかまりが、今なお執念深く尾を引き、自分にこういう態度を取らせたように思われ、不愉快だった。ひと月前に翠から伝えられた、孫にあたるふたりの息子に会ってみたいという、澄美の希望を握り潰していたのまでが思い出された。

そればかりか、今日の午後、教授に呼ばれて叱責されたことなど、ここ数日続いた厭な出来事が次々に浮かび上がり、胸の入口にひしめきだした。

水島は、頭を振り、肩を回して気を逸らそうとつとめた。車内の広告の大見出しに視線を集め、

一文字ずつ丹念に読んだ。

分院に到着して白衣に着替えると、引きずってきた迷いと後悔にようやくふんぎりがつけられたように感じ、いくらか気分が上向きになった。普段通りの足の運びで、人のいない外来棟の待合室を抜けて、人工腎臓センターへ入った。

管理を効率よくするためにL字型の大部屋にされた透析室には、五十台のベッドが向き合っており、それぞれに子供の背丈ほどの長方形の人工透析装置が据えられている。その前に置かれたステンレスのスタンドには、細い管のついた直径五センチの筒状の透析器ダイアライザーが下げられている。

ダイアライザーから伸びたストローほどの太さの管は、患者の腕や器械に渡され、針刺しの終った血管と接続されて、暗紅色の血液を循環させている。

血液が浄化されるまでの五時間近く、移動を禁じられた患者たちは、管でつながれたまま、銘々に用意されたテレビを、ベッドの足の方に置いて横たわっている。テレビを観る者はイヤホンを使い、読書する者は胸の上に広げ、看護婦と喋っている者も大きな声を出さないように気をつけている。

水島は、L字型の部屋の角の部分にある看護センターに坐って、すべての患者の装置が動き出すのを待ちながら、この巨大な無機的な光景に、大きな慰めを感じた。

金属と器械が優勢の、あらゆる感情を峻拒して見える装置の数かずが、患部に当てられる氷塊のように、水島の心に好ましく触れる。つい先刻までであった鬱陶しい思いが、胸の中でどんどん小さくなって行くようだった。

看護センターの壁の上半分は、ガラス張りになり、ほとんどのベッドが見渡せた。

七、八名の看護婦が、受持ちの患者の腕の血管に、透明なテフロンの外筒付きの太い針を刺し、そのまま血管に残した外筒を透析器ダイアライザーの管とつないでポンプを動かして行く。一人終るたびに隣のベッドへ移り、同じ操作を繰り返している。

看護婦が仕事を終え、一斉に窓のブラインドを下ろした。部屋は、初秋の残照を失い、光を強めた蛍光灯が、装置の放つもののしさと冷たさを際立たせる。

動き回っていた看護婦が引きあげるにつれて、器械とベッドと患者という組み合わせが取り残され、閉鎖された特殊な空間という特性がさらに明瞭になる。宇宙船の内部とも、人工的な胎内とも見える。

看護婦と入れ違いに、水島は回診に出かけた。

毎週日曜日を除く隔日の三日間ずつを、午前八時半、午後一時半、午後六時半の三グループに分けて行われる透析は、午前の部が家庭にいる女性や老人、午後は遠方から来る少人数の患者、夜間が仕事や学校帰りの勤め人や学生という色分けになり、今夜の患者は、すべてが男性で、十六歳から七十歳までの年齢だった。

水島は、三、四年のつき合いになる患者たちと会釈を交わし、記録された血圧と体重を前回のデータと比べて、この二日間の摂生の具合や体調を診ていく。

尿がほとんど出ないため、彼らの摂取した水分は、汗と大便で失われるほかは体内に残り、血液量を増やして血圧を上げた。食事や水分を摂り過ぎると、ときめんに血圧が異常に上昇し、肺に水が溜まり、動悸や息切れ、心不全による全身のむくみなどが現われた。ふんだんに食品の満

ち溢れた時代に生活しながら、生き延びるために厳しい自己規制を続けざるを得ない。

一生の闘病生活を余儀なくされる彼らの中に、欲望に取り憑かれたキラキラした顔を見るのは稀で、洗いがらしの、脱色しかけた木綿布のような、淡白な表情が多かった。

患者たちは、二キログラムから三キログラムという標準的な体重増加を保っている。表情も落着き、特別に体の不調を訴えもしない。制限された生活に合わせ、驚くほど巧みに自分自身を宥めている。

病気の不安を紛らわすために、好きなビールをやめられずに幾度か心不全を起こした四十歳のKは、ここ一年間安定している。年齢相応の深みのある、いい眼差しを向けてくるようになった。十八歳の専門学校生のTは、ヘッドホンを耳にして、目を瞑っている。彼の場合は、得意な絵が支えになったのだろうか。大したバニックもなく人工透析に入り、馴染んだ。だが決して将来を楽観しているわけではないのは、時折見開かれる目蓋の蔭の暗い色で窺える。

その三人置いたベッドには、引退した漫才師のように飄々として冗談口を忘れない老夫婦がいる。朝市の片隅からそのままやってきたような前掛け姿の老妻は、透析中の夫の傍らに坐り、イヤホンを耳にテレビを観て一緒に笑っている。隣のベッドにいる元高級公務員の、悲哀感を拭い去れない縮んだ表情とならべると、見事なコントラストになっている。

水島は、回診を続けるうちに、自分自身の心の不調を忘れた。

五十のベッドに横たわる患者たちの存在は、些細な感情の鬱滞を許さない。他人の大きな不幸が、意図せずはこちらの不本意を慰撫するかのようだった。水島は、知らぬ間に、いつもの自分のやり方を取り戻していた。

し字型に沿って患者たちを診て、最後の一角に辿りついた時、水島は、教授の叱責の原因となった男を一番奥に認めた。

突き当りの壁際で、安楽椅子に坐ったまま人工透析を受けている菅野広介かんのこうすけだった。居眠りでもしているのか、頭を垂れている。

菅野広介とは一日も早く会わなければならなかったのだが、月、水、金にやってくる透析グループだと考え、今回は諦めていた。この場で話せるならば、願ってもないことだった。

昨夜遅く、篤志家から腎臓が提供され、緊急手術の連絡が菅野広介になされた。ところが、この二年間、それを渴望して待機していたはずの彼は、会社の仕事を理由に断わってしまった。

本院で手術準備を整えて待っていた教授とスタッフはすっぱかされ、周章てて第二位、第三位の免疫適合者に情報を流して、貴重な臓器を無駄にせずにすんだ。

全国で二万人の腎臓の移植希望者がおり、彼らに恵まれる臓器は、一年間にわずか数百にすぎなかった。その稀有なチャンスをと、たとえ仕事があったとしても拒絶するとは考えられない。

昨夜は出番でなくて知らなかったが、もし現場にいれば、何としても説得したにちがいないかった。

水島は、菅野の姿を目にした途端、問い糺さなければという思いが満ちるのを感じた。

三十八歳になる菅野広介は、観光地や売店へみやげものを卸す会社の課長をしていた。貧血気味の青白い顔を俯けて、膝の上の本を読んでいる。

読書家の彼は、試験的に座位での人工透析をしようと思った時にすすんで希望した。摂生が悪く、体重過剰になりがちな患者は、透析で余分な水分を除く時に低血圧を来すために、頭を高

くする座位は危険で許可できないが、模範患者の菅野ならば大丈夫、と職員の見解が一致して、彼に椅子式の透析器が与えられた。

「やあ、どうですか」

水島は、できるだけ普段通りの声を出そうとつとめた。

泡立ちかけた思ひは、彼に近づくにつれて静まっている。まるで彼の周囲から人を冷静にする電波が放射されているかのようだった。教授の叱責をそのまま持ち込もうとした感情は冷やされ、移植を拒んだ理由を知りたいという疑問だけが、胸に残っている。

「ああ、水島先生、昨夜は申し訳ありませんでした」

手製のカバーのついた本を閉じた菅野が、坊主刈りに近い頭を下げて表情を崩した。笑いの蔭から隠されていた童顔が顕われ、仏像のような柔らかな光が流れ出た。

水島は、やはり咎めるような声を出さないでよかったと思ひながら彼に向った。

「驚きましたよ。本院ではすっかり準備をして待っていたんですから」

「本当にすみません。で、他の人に無事渡りましたか？」

「ええ、どうにか間に合いました」

「そうですか、よかった。それが心配でしたから。本当にすみませんでした」

菅野は、針刺しの終った左腕にかぶせられたガーゼを直しながら微笑み、もう一度頭を下げた。透析用に小手術によって動脈と短絡的につながれた静脈が、鉛筆ほどの太さになって左腕を蛇行している。それに沿って針の跡が染みのように付いている。移植手術を受けなければ、一生この傷から逃れられない。

「どうして辞退したんです？ 何か特別に都合の悪いことがあったんですか」

「ええ……いえ、大したことでは……ただ、気がすすまないと云うか……」

「でも希望されていたはずですよね？」

「ええ、そうなんです……」

水島の問いに、菅野は、何も映していないブラウン管をのぞき込んで、曖昧に口を閉じた。彼なりに真面目に回答を捜そうとしているのだろう、力の入った眉の動きに彼の困惑が顕われている。水島はそう感じて、気にかかっていた疑問をすぐに彼の前へ出した。

「二度目が失敗したからですか。またそうなるんではないかと」

「いえ、まさか、そんなことはありません」

菅野は、驚いた顔で水島を見、きっぱりと否定した。

九年前の二十九歳の時に、右側の下腹部へ腎臓移植をした彼は、ほぼ七年間、正常人の生活に戻れた。しかし徐々に拒絶反応で機能を失っていた移植腎は、七年目ですっかり役に立たなくなり、ふたたび人工透析器につながる境遇になった。

それから半年経った二年半前に、彼は幸運にも二度目の腎移植のチャンスが与えられた。だが、新しく左側に植えられた腎臓は、わずか三ヶ月で使いものにならなくなった。すでに良質な免疫抑制剤が発見されて、手術の成功率は、初回の時よりはるかに高くなっていたにもかかわらず、用意された腎臓の鮮度の問題があったためだろうか、失敗せざるを得なかった。その原因を、もしかしたら菅野が詮索したのかもしれない、と水島は考えた。

一番心に引っかかっていた前回の失敗を否定されて頷いたものの、水島はすぐには納得できな